

三つの宝とは何か。

第1は練習または練習の体験 — 不可能を可能にするものは練習だという体験 — を持つことである。

人類の歴史は見ようによっては、不可能を可能にする過程の連続である。それは、一つは発明によって、一つは練習によって行われる。(中略)

他面、我々人類は無数の不可能を練習によって可能にしつつある。早い話が水泳である。水泳を知らないものは、水に落ちれば、溺れて死ぬ。水泳を知るものは、容易く浮かぶ。水に落ちて死ぬものと、浮かんで生きるものとは、別種類の動物だといっても好いくらいの違いである。幼児が水に落ちたのを目に見て、黙って見ていなければならぬ人間と、飛び込んで助け得る人間とは、道徳的に別種類の人類だといわねばなるまい。そうしてそれは、練習するか、しないかによって岐れる。

これは一例に過ぎぬ。他の無数の場合に練習は不可能を可能にするのである。10メートルの高さから水に飛び込むことは、練習しなければ、いかなる勇士も敢えてしない。また練習しなければ100メートルを十五秒で走ることさえも不可能である。さらにあの機械体操で、ほとんど重力というものを無視したかと思われる様々の人体の動きや姿勢は、練習ということを度外しては、ほとんど思いもよらぬことであろう。

あれらこれら無数の場合において、無数の不可能を可能にするものは、説明でなく、説教でなく、ただ黙々として続けられる練習これのみである。(中略)

第2の宝は何か。フェアプレーの精神だと私はいいたい。

フェアプレーとは何か。それは正しく、いさぎよく、礼節をもって勝負することである。反面からいえば、不正をにくみ、卑怯をにくみ、無礼をにくむ精神である。この精神は無論誰もが抱くものであるが、勝負を争う競技の間に最も痛切に体験され、養われる。

Be a hard fighter and a good loser. (果敢なる闘士で、そしていさぎよき敗者であれ)、果敢なる闘士であればあるほど、そのいさぎよき敗者であることの意味は深い。フェアプレーという言葉は英語であるが、その精神は、直ちに日本人の心に訴える。「尋常の勝負」といい、「負けっぶり」が好いか悪いかという言葉をもつ日本人は、本来フェアプレーということをもっと尚ぶ国民ではないのか。(中略)

第3は何か。私は友だといいたい。友は人生の宝である。わが信ずる友、われを信じてくれる友、何でも語ることできる友、何をいっても誤解しない友、これを持ち得たものは、人生の最も大きい幸福を得たものというべきである。もしもついにそれを持ち得なかつたとすれば、そのような人生は貧しい、寂しい一生であつたといわなければならぬ。我々の友に種々様々の人があるように、我々が友を得る縁と機会もまた種々様々である。同窓の友がある。商売取引の間に得た友もある。たまたま船や車に同乗した機会に終生の友を見いだすということも、決してないとはいわれない。しかし、スポーツによって得た友が、利害の打算を全くはなれた、一種特別のものであるということは、体験あるもののひとしく認めるところであろうと思う。同じチームで練習の労苦をともした友、共に試合に出場した、いわば戦友ともいべき友、更に敵味方となつて勝負を争った、その相手、この人々との交りはこれは格別のものである。

友は、或る意味で日光に比すべきものであろう。それは日の光と同じく、我々の心をあたため、我々の心にあるよきものを育てる。向日葵は太陽に向かって咲くという。それは向日葵には限らない。すべての花、すべての葉は、日の光を得て咲き、しげる。同じように、我々の心にあるよきものは、友を得て、咲き、またしげるといふことができる。

もしもスポーツがそのような友を人に与えるとすれば、これを第三の宝として挙げることに、誰も異存はあり得ないと信ずる。

本気な人間になれ

福田雅之助

君達は、〇〇の校風を慕って、〇〇に入学した学生であるから勉学が第一である。そして好きなテニスをするために、庭球部に入った同じ志を持った、同じ庭球好きな人たちの集まりである。皆庭球の熱愛者である。選手はピラミッドの頂点であり、部員はその土台を築いているのだ。その土台の多数の部員が、頂点の選手を支持しているのだ。従って下積み多くの部員がいなくては、強い選手は出てこない。選手は部員の下積みの苦勞に感謝し、部員は選手を盛り上げる努力を喜んですべきである。ここに団結が生れる。

従って上級生は下級生を思いやり、下級生は上級生を敬い、同僚は互いに親しみ励まし合う、ここに和の結合が生れる。左手が右手に従い、手足が一つの動作に従うように協力し協心してより強い庭球部を造るのが、部員のモットーである。部員には欣然として順う。徒らに批評したりしないで、まず従順で自分の務めをしっかりと行うべきだ。

君達は、〇〇に入った時は、素直に熱心にテニスをしよと心を決したことだろう。その素直な心と純真な心を忘れないようにして欲しい。一年を過ぎると入学当初の純な心を忘れ勝ちになる。二年目に危機が訪れる。部生活にも馴れてきて、心に油断が生れる。この時テニスを忘れて、脇道に外れやすい。4年間熱心にテニス一筋にやれば、教室で得られない教訓を体得出来る。テニスを通じて終生の友情を結ぶことが出来る。「初心忘るべからず。」

庭球部にはロール引き、ライン引き、コートの水撒きなどという仕事がある。一年生は皆この仕事をしてきたのである。嫌なつまらぬことだと思ってもれない。これは長年に亘って続けられてきた、尊い訓練である。これを怠って得をしたと思ったら、間違いだ。その怠りは逆に大きな損である。世界的の大選手になった、故佐藤次郎も忠実にこれらをやっていた。忍耐力と辛抱心の訓練がそこにあるのだ。自分の責任を喜んで果すことが、庭球部員の資格である。つまらぬことと思わず、喜んで進んでやる心があれば、嫌でなくなる。つまらぬと思ったりするから、つまらぬことになるのだ。小事を大切に、進んでやることで、小事が大事となるのである。

一たびコートに立ったら、なんでもいつでも本気でやれ。球拾いをしていても、その球拾いを忠実に本気でやれ。本気でやれば、そのコートのプレーをよく見ることになる。サーバーがどっちだったかと、判らぬよううっかりした球拾いをしてはいけぬ。そのコートのプレーをよく見ていなければ、いい球拾いは出来ない。

両プレーヤーをよく見ていれば、両プレーヤーの動きが判る。向うのプレーヤーが、どこに打とうとしているかが判るようになる。こちらのプレーヤーがどう動くか考える。どうしてあんなつまらぬエラーをするかと、自分に判るようになれど進歩である。そして自分もあんなエラーをしないようにする。他人のテニスを見なければ、テニスは進歩しないというのはそこにある。球拾いを本気でやればよい経験を得る。球拾いもコートを走ることも、体操も本気でやって自分のものにせよ。

テニスは生やさしいスポーツではない。あの球をラケットの真中で、いつも打てるようになるには、時と努力がいる。ある球の返球は、相手コートのある場所に、ぴったり打てるようになるのは、容易なことではない。

一球に精神と動作を集中し、一打に全精力を集中せよ。君達は確信をもって、一打しているだろうか。半信半疑で球を打っていないだろうか。自信を持って、しっかり球を打てるまで、精神努力し実力をつけるまで、練習すべきである。

テニスは平生が肝心である。平生いい加減な練習をしていては、いざ試合となった時、自分の力を十分發揮することはできない。練習即試合である。この心掛けでなければ、いい試合はできない。平生どんな練習をしているかが、自ら試合に現れる。試合になってあわてても遅い。

だから平生の練習をいつも、ベストを尽してやるように心掛けよ。そうすれば試合に自分の力が現れる。平生しっかりした練習をしていなければ、立派な試合は出来ない。試合を恐れず上らず無心で、ベストを尽せるようになるには、平生の練習を試合と心得て、いつもベストを尽してやるべきである。テニスに徹すれば、そこに哲学もあり禅もある。

テニスは巧くなり強くなることを目指すのはいままでもない。テニスは巧い球を打って、試合に勝つことだけではない。テニスの大きな目的の一つは、フェアプレーをしスポーツマンシップを發揮することにある。そこに勝敗を超えた「グッドルーザー」の所以がある。テニスはテニスを通じて、立派な人間になる修業である。これが本当の眼目だと思う。

だからコートマナーを立派にすべきだ。徒らに判定に対して不服な態度を取るな。判定は審判がするので、自分がするのはいい。エラーして怒って、ボールを叩きつけたり、打ち飛ばしたりするのは悪いマナーだ。自制心のない証拠である。テニス眼のある人に笑われるだけである。

時間を厳守して決して遅刻しないようにする。止むを得ず棄権する時は、必ず通知して無断で棄権しないようにする。君達は必ず庭球規則を知っておいて、規則に従ってプレーするよう努力せよ。ラインを踏んでサーブするようなことは、規則違反である。フェアプレーの立場において、行われるのだ。ケイレンを起して休んで、プレー出来ると思っていない。プレーは継続すべきである。ケイレンを起したことは、既に体力的に負けているのである。試合は技術だけ戦わすのではなく、体力もそれに含まれているのだ。このことを忘れるな。

スタンドにおいての拍手は、自他にかかわらず、「グッドショット」にのみすべきである。度を越えた応援は醜態である。君達は平生の練習で、インとアウトを正直に判定するようにせよ。こんなことは些細のようだが、これはフェアプレーの大きな問題につながり、大事なことである。

要するに君達は、フェアプレーを体得した立派なテニスプレーヤーになることだ。テニスを通じて、本気な人間になることだ。いい人間がいいテニスを生むと私は思う。コート上でもコート外でも立派なスポーツマンに、君達はなつてほしい。

「マナーキッズテニス大使」ウインブルドン派遣と「佐藤次郎」

財団法人日本テニス協会は2006年6月、「マナーキッズテニス大使」6名をウインブルドンに派遣し、英国のボールパ
ーソンと交流・親善試合を行うという新聞記事が掲載されておりました。マナーキッズテニス大使は文部科学大臣杯マ
ナーキッズテニス全国小学生団体戦において、試合結果、マナー、感想文、運動能力を勘案して選抜されたそう
です。「マナーキッズテニス大使」のアイデアは我が国テニス界が生んだ最も偉大なテニス選手「佐藤次郎」からヒント
を得たとのことです。佐藤次郎という人についてみなさんはどのようなことを知っていますか？

佐藤次郎は、明治41年（1908年）群馬県群馬郡長尾村夏保（今の渋川市横堀）に生まれました。長尾小学校
に入ると間もなく、兄とテニスを始めました。小さい板をけずってラケットがわりにし、自分の家の庭で、一人の時は家
の壁を相手に練習をしていました。学校にはラケットがあり、三、四年生のころは、兄と二人きりで、放課後だれもいな
くなるまで練習していて、先生に注意されることもたびたびあったそうです。しかし、上級生や先生たちが相手をし
てくれることもあって、力がめきめきついてきました。そのうち、上級生も先生も歯が立たなくなりました。

ほかの運動も得意でしたが、勉強もがんばり、一年から六年まで抜群の成績で、クラスの友達からの信頼も厚く
責任感も強いので、毎年学級委員をするほどでした。

その後、渋川中学（今の渋川高校）に進学してテニス部に入りました。校庭は軽石がごろごろしていて、まともな
テニスコートがありませんでした。そこで、コート作りをすることになりました。

とてもきつく、部員にとっては最もいやな仕事でした。しかし、入部してすぐに正選手になった次郎は、中心になっ
てこの仕事に取り組みました。コートの土をふるい、学校近くの工場から石炭がらをもらってコートに敷き、さらにロー
ラーを借りてきて、コートを固めました。こうしてできあがったコートは、日曜も休日も、毎日使えるようになったそう
です。

また、練習をすると決まった日は、たとえ雨でもコートに出かけ、ほとんどの部員が休んでいるのに、彼一人他の部員が来
るのを待っていたそうです。「約束というのは、何人かの人の間で成立するもので、一人の身勝手な判断から遅刻したり、
休んだりはできない。」というのが真面目な次郎の考え方でした。

次郎は『弱きを助け、強きを敬う』という言葉が好きでした。彼の高度なテニスの技術は、外国の強い選手から学
んだものでした。さらに『勝利は技術だけではとれない。全人格でとるのだ』と考え、より高い目標を立て、それに向
かって強い意志と実行力で取り組みました。彼のテニスは、みるみる進歩したそうです。

次郎の技術の高さに加え、コートマナーの良さは外国の人々にも高く評価され、新聞でも取り上げられました。外国
で地元選手と試合をする時にも、外国の観客の多くが、次郎を応援しました。そのころの日本は、まだまだ世界に知ら
れていない国でしたが、次郎の活躍は、外国での日本の評価を高め、多くの日本人に勇気を与えました。

昭和五年、フィリピンのカーニバル大会で優勝し、そのときの優勝カップが「佐藤次郎杯」として寄贈され、今でも
その大会が渋川市で行われています。また、その年には日本チャンピオンになり、世界タイトルを目標に、ヨーロッパで
日本代表の一員として戦いました。ドイツを破り日本がベスト四に入る原動力になりました。彼はその結果、世界ラ
ンキング三位（1932年）という記録を獲得し、日本中がわきたちました。この記録は、日本人の史上最高の記録とし
て、今でも破られてはいません。

みなさんも、佐藤次郎のように、勉強、スポーツ両面で努力し、立派なマナーを身につけ、「マナーキッズテニス大使」
になるよう、挑戦しましょう。

佐藤次郎母校 群馬県渋川市立長尾小学校 「道徳」教材を参考に作成

規き

この一球きゅうは絶対無二ぜったいむにの一球いっきゅうなり

されば身心しんしんを挙げて一打いちだすべし

この一球一打いっきゅういちだに技わざを磨みがき體力たいりよくを

鍛きたえへ精神力せいしんりよくを養やしなふべきなり

この一打いちだに今の自己いま じこを發揮はつきすべし

これを庭球ていきゅうする心こころといふ

昭和四十九年六月 福田雅之助
しょうわよんじゅうきゅうねんろくがつ ふくだまさのすけ

球趣きゅうしゆ

一、テニスを楽しむ健康たの けんこうになれ

一、行き交ゆ かわう球たまに友情ゆうじょうを温あためよ

一、フェアプレーをモットーとせよ

一、この一球いっきゅうを真剣しんけんに打うて

一、規則きそくに従したがい常に全力ぜんりよくを尽つくせ

一、よいマナーを身みにつけよ

一、テニスを通つうじてよい人間にんげんになれ

昭和四十八年十一月 福田雅之助
しょうわよんじゅうはちねんじゅういちがつ ふくだまさのすけ